

予備知識持ち判断力を

詐欺、悪徳商法を防ぐ

群大柿本教授に聞く

振り込め詐欺や悪徳商法の被害を受ける高齢者が後を絶たない。「自分はまだまされない」「そんなのうそに決まっている」。そう思っている、だまされてしまうの

はなぜか。群馬大社会情報学部の特任准教授(社会心理学)は「さまざまな手口に対する予備知識を持ち、判断力を鍛えて」とアドバ

イスする。

だます、だまされるは人間だけではない。例えば昆虫のオナフシは擬態で木の枝のように見せ、チョウチンアンコウは光を発して餌となる小魚をおびき寄せ

る。これも敵から身を隠したり、捕食するためのだましているのだという。

「人間も同じ。詐欺師もだますことで生きています。したがって、うまくなるためのテクニックを学び、工夫する。普通の人が知識もないままでは、だまされるのは当然かもしれない」

家族間の連絡も重要

「権威」に注意

だましの手口は社会心理学的には、「権威」「社会的現実(ソーシャル・リア

リティー)」「ギブ・アンド・テイク」などに分類される。「権威」は警察官や弁護士などをかたられ、服装や言葉遣いからうそではないと判断してしまう。「社会的現実」とはみんなが当たり前と思うと自分もそう思ってしまう、なかなか疑えなくなること。親切にされると信頼関係が生まれ、何かを買ってあげなきゃと思ってしまう心理が「ギブ・アンド・テイク」という。

「高齢になれば判断力はどうしても衰える。一人でいけば精神活動も衰えがち。子供から連絡があればうれしいし、そうあってほしいと願っている、困ってほしいと助けたいと思ってしまう。だから、いつでも連絡を取れる態勢をつくる。話し合い、詐欺被害のニュースを自分のこととして解釈することが必要」

振り込め詐欺は「善い人でありたい」という規範意識を利用する手口だ。「家族への愛から、息子が会社の金を横領したと言われれば恥や解雇への恐怖も生ま

れる。そうした心理からだまされてしまう」

「別世界の話と違ってしまっている」と柿本教授。

「判断力を鍛え、家族と連絡を取れるようにするのが大切」と話す柿本さん



「ニュースを聞いても、自分はまだまされない、自分には起らないと思ってしまう。既存の価値観を維持しようとして、バイアス(先入観)が働く。川の水が増水していても経験値から大丈夫と判断してしまうのと同じことが言える」